

---

---

## 抽象表現主義の初期作品における神話的モチーフ

### —目と英雄—

---

---

1940年代前半、のちに抽象表現主義の代表的画家となるマーク・ロスコとアドルフ・ゴットリーブはシュルレアリスムの思想と作品を学び、有機的形体や断片化されたモチーフを組み合わせるシュルレアリスム特有の作風を取り入れ、神話や古代美術から着想を得て作品を制作した。本発表では、ロスコとゴットリーブの初期作品における「目」と「英雄」というモチーフに注目し、それらの作品を、予言者の目と英雄的性格を有する芸術家の自己表象として考察する。

第二次世界大戦の激化を受けて、芸術の中心地であったパリから多数の先進的芸術家がニューヨークに活動の拠点を移し、とりわけアンドレ・ブルトンやマックス・エルンストラが亡命したことが刺激となって、ニューヨークの芸術家たちの間でシュルレアリスムへの関心が高まったことはよく知られている。のちに抽象表現主義として知られることとなる画家たちも例外ではなく、ロスコとゴットリーブは、オイディプス王などのギリシア神話を頻繁に主題に取り上げた。そこで重要となるのが英雄的登場人物と目のモチーフである。オイディプスの物語において視覚は重要な要素であり、オイディプスと盲目の予言者テイレシアスという二人の登場人物は、それぞれ精神的、身体的な盲目性を体現する。ロスコによる《テイレシアス》（1944）と同様に、ゴットリーブの《予言者》（1950）もテイレシアスを描いていると考えられる。これらの作品に表された目のモチーフは、見るという行為と真実を見通す能力を表す一方で、片目や暗く淀んだ目は視覚の欠如あるいは理解力のなさという比喩的意味での盲目性を示唆すると考えられる。

先行研究において、ゴットリーブが繰り返し描いた目のモチーフとオイディプス神話や古代美術との関連がしばしば取り上げられており、またロスコの《テイレシアス》は芸術的直観や盲目を暗示するという指摘がなされている。しかしながら、個別の作品や同主題の作品の考察が中心であり、神話主題画または初期作品に共通する思想内容を踏み込んで考察するものは少ない。そこで、これらの作品を他の初期作品、同時代の芸術家による声明と詳細に比較、考察することで、《テイレシアス》と《予言者》に描かれる人物は芸術的直観をもつ彼ら自身の肖像であり、英雄的人物としての芸術家像でもあることを結論づける。

1943年、ロスコとゴットリーブは批判的な展覧会評への回答として声明を発表し、その中で「芸術とは、危険を冒す者だけが探索できる未知の世界の冒険」であると説明している。これは、英雄的芸術家像を暗示するとともに、彼らが真実を見通す予言者の視点をもって新しい時代の絵画を制作するのに対して、それを評価しない批評家たちの盲目さを批判してもいると解釈できるのである。